

巻頭言 「討論」について

西 直哉

Discussion

Naoya Nishi

2011年1月より庶務理事を仰せつかりました。前任の小山宗孝先生のような気配りの行き届いた仕事をするよう心がけていく所存です。編集理事の相樂隆正先生から「新庶務理事は巻頭言を書くことになっているので」と執筆依頼されてから、筆が進まぬまま時間だけが過ぎてゆき困りました。文字どおりの浅学非才の若輩であり、皆さんが感服するような雑感や提案を書けそうにもないので、まず私の日本ポーラログラフ学会の思い出を書いてみようと思います。

1998年に福井県のすかつとランド九頭竜での本会討論会（青木幸一先生が世話人）に修士一回生のときに参加したのが、私の本会への関わりの最初です。当時、垣内隆先生の京都大学大学院工学研究科での研究室は発足したばかりで、装置の立ち上げや練習実験の経験しかなかった私には学会で発表できるような研究成果はありませんでした。垣内先生から発表なしでただ参加してみるよう後押しいただき、初めての学会参加となりました。講演内容は電気化学を習い始めたばかりの私には理解できませんでした、ひとつ鮮明に記憶に残って

いるシーンがあります。某先生（当時は博士後期課程在籍）が口頭発表の前口上で、「前回の発表で指摘いただいた点について検討してきましたので報告します」と言ったのです。当時の私は、学会発表というものが演者から聴衆への一方通行ではなく双方向の「討論」であること、また、その「討論」が長期にもわたり続くことに、ただ感動しました。発表が終わった後、その指摘をしたらしい先生との質疑応答が始まり、次の討論会までの検討課題ができたようでした。世話人の青木先生がその討論会で掲げておられた「学芸会」ではなく「討論会」を（本誌 Vol 44, No3/6, (1998), p103）という目標は達成されているようでした。

それ以降も本会討論会に参加し、また、他学会にも参加するようになり、本会討論会での「討論」が他学会でのそれと一味違うことに気付きました。他学会でしばしば見かけるような、枕詞をちりばめながらの質問とは対極の、遠慮のないすどい質問、それになんとか答え、また時にはやり返す演者、休憩場所や懇親会会場でも議論を続

ける人々、これらの光景が頻繁に見られるのは本会の特長の一つと言えるのではないのでしょうか。

過去の本誌記事を拝見し、また、先生方のお話を伺っていると、本会の今後のありかたについては既にずいぶんと議論されてきているようです。世の風潮が応用・実用研究志向であり基礎電気分析化学をじっくりと研究しづらいことや、研究の各論化がすすみ会員間で共通の問題意識を持ちづ

らいこと、など、状況は決して明るくはありません。しかし、何人かの先生方のおっしゃる「どうにかなるんちゃいますか」に私も賛同します。本会討論会で「討論」が見られる限りは、そして、その「討論」を愛する人々がいる限りは、「どうにかなる」のではないのでしょうか。

(にし なおや・京都大学大学院工学研究科、本会庶務理事)